

今井原の鴉

中島八十一

先に續き、長野市善光寺平の一角を占むる今井原の自然なり。花咲き蛇出づる原には千曲川と犀川よりの水利に據りて一帯には水田あれば畑あり。武田・上杉、いづれもいづれも、この地の稲作なくして戦を續くこと難かるべしと承知してあり。

今時の農家に質せば、米の産量これ家族の年間消費量程度なれど、我が家はパンにて濟ませ、餘剰なるはJAに出荷すとの由。かくの如くんば、つひには水田を放棄するにや至らんと問へば、桃やブドウのごとき商品作物の金になりこそすれ、その手間の過重なること甚だしきければ、なかなか繼承危ぶまれん。田は樂なり、いつまでも續くらんと笑ひたり。今井原の田はいづくも四角四面の一角を土にて埋め、角を落したることし。かかる田の造作は長野の特徴なりや、いかなる理由に基づくや、東京暮らし長き身には目にするも不思議なり。田植多の季節を迎へ、苗を満載したるトラクターのいざ田に乗り込まんとするに、この角こそ出入口になるらめ。これがために収量のいかほど減るや知る由もなけれど効率の前にこれを難ずる者なし。今や全國の田すべてはかかる角を持ちたらん。余の郷里愛知にては、トラクターにあらば土地はいかほどありとも構はずとうそぶく者ありけり。

畑にては名を初めて聞きし葉物類數多栽培し、ユキ菜、ワラビ菜、カキ菜、ワサビ菜と並びて、その姿・味はひ、何人か能く想像するを得む。さは、僅々一例に過ぎず。名を知りたる葉物を比ぶれば概ね東京の半値近き價格にて賣らる。關心を惹くは小麥の栽培なり。信州と聞けば蕎麥と答ふるは宜^{むべ}なるかなと思はるれど、境を接する篠ノ井には絶品の饅^{むす}飽あり。然^{しか}則^{らば}麥^{なほ}の栽培を絶やすの儀はなかるべし。

稲作を第一等とし、續いて麥作を第二等とするは歴史の必然にて、この地のうどんに蕎麥に劣らず農家の蘊蓄込めたらん。畑にて見慣れぬものは胡桃なり。中に高さ十メートルに垂^{なんな}んとする大木あるも、總じて五六メートルに詰め居り。ト月末に木全體に長さ十センチ

手に満たざる細長き雄花の垂れ下がり、一週間ほどにて萎れ落つる。その後みるみる内に青き實の二つ三つと固まりて膨らみ、雌花もありけりとその段になりて初めて氣付く。

結實を楽しみに待つは人に限らず。ある秋の一日、件の外歩きを晝休みに始む。大學を出づる折、すれ違ひたる職員はいつてらつしやいと聲を掛く。長野は秋の訪れ早しとはいひ條、當地にて購入したる衣類にて身を覆へば、果たして低き氣温の意識に上ることなし。加へて昨今はマスク付け、帽子と合はせれば裝備としてこの上なし。田に圍まれたる舗装なき農道を歩むに、脇の農具小屋の屋根に鴉一羽留るを見たり。逃げもせでこちらを見つむること品定め如し。何をか嘴に啣へたり。小屋脇を通り過ぐるその折、鴉の口からその何かの放たれ、音を立ててトタン屋根の線條を轉がり、ぴたりと正確に余の足下に落ちたり。見れば胡桃の實なり。プレゼントか、欲する譯ではなしと思ひつつ、そのまま五十メートルを歩き過ぎ思ふところありて振り向けり。鴉も我が姿を凝視せり。戻りて胡桃踏みつけ、このくらゐなれば、鴉も食ふを得むといふほどに細かに砕きたり。近隣を一回りして再びその場所を訪ふに、可食部は見事に食ひ盡し、殻のみぞ残れる。

(令和三年六月二十一日受附)